福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

「省察的実習」としてのラウンドテーブルの準備と運営：学生によって運営されるラウンドテーブルの組織運営に関わって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢内, 琴江 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10862

「省察的実習」としてのラウンドテーブルの準備と運営

学生によって運営されるラウンドテーブルの組織運営に関わって

矢内　琴江

Ⅰ. はじめに

この実践記録は、大学院生から教員へと私自身の立場が変化しながら関わった、早稲田大学教育実践研究フォーラムにおけるラウンドテーブルの6年間の展開を省察する。とりわけ、このラウンドテーブルの特色である、学生による運営に着目しながら自分の実践と、このラウンドテーブルの展開をふり返り、その学習的な意義を考察することとしたい。

私が早稲田大学教育実践研究フォーラムに関わるようになったのは、2012年に文学研究科教育学コース博士後期課程に入ってからである。また、ラウンドテーブルそのものも、博士課程の院生になって、はじめて経験した。福井大学やお茶の水女子大学で開催されていたラウンドテーブルに、報告者として参加したのが最初だった。この時は、東日本大震災の復興支援のための学生や院生による復興支援団体での実践を報告した。そして、同じ年に、早稲田大学の村田晶子先生（文学部・教授）の大学院の演習の一環で、早稲田大学教育実践研究フォーラムの実行委員として、フォーラムの企画運営と合わせて、その中で行われているラウンドテーブルの運営に関わった。その後、2014年から、文学学術院総合人文科学研究センターでの助手、また非常勤講師、さらに2017年からは文学部教育学コースの講師（任期付）として関わることになった。講師の業務は、週に3コマの授業、コース運営に関わる実務、学内学会の実務であった。したがって、ラウンドテーブルとの関りは、担当する演習の一環として、コースの行事として、学内学会の業務としてという3つの側面からの関わりになった。担当する演習とは、人権教育論で、必修選択演習として設置された5つの演習のうちの1つだった。また、後述するが、早稲田大学以外の大学で非常勤講師も務めており、その授業の受講生たちもまた、授業の一環でラウンドテーブルに参加するように授業を準備した。以上のように、私自身と早稲田大学のラウンドテーブルとの関りは6年間に及び、院生から教員へという若手研究者のキャリア形成の最初の段階で関わることになった。

この6年間の実践のふり返りに先立って、以下では簡単に、フォーラムの概要について最初に説明したい。なお、本実践記録は、『早稲田教育学研究』第10号（2018年3月）に掲載されたものに加筆修正したものである[1)]。

Ⅱ. 早稲田大学のラウンドテーブルについて

2018年11月10日（土）に開催された早稲田大学教育実践研究フォーラムは第13回目を迎えた。学内外から約80名が集まった。午前は、教育学コースを卒業した２人、１人は社会福祉職の自治体職員の方、もう１人は高校教員の方を迎え、今までの実践の歩みを語っていただき、その後、ポスター・セッション、昼休みをはさんで、午後はラウンドテーブルを行った。今年の参加者は、教育学コースの学生だけではなく、学内では文化構想学部の学生、他大学からは、大正大学、埼玉学園大学、東京家政学院大学、明治大学、東京学芸大学の学生が参加し、さらに社会人では、明治大学で行われている「コミュニティ学習支援士養成講座」の受講者が講座の一環で参加した。ポスター・セッションには、教育学コースの2年生による教育施設を訪問した報告ポスターや、大正大学の学生たちのよる社会教育実習のポスター、公民館職員

の方によるジェンダー学習講座案のポスター、ジェンダー・ワークショップ実行委員会によるドラマ「逃げるは恥だが役に立つ」のジェンダー分析ポスターが並んだ[2)]。ラウンドテーブルでは、社会教育、社会福祉、地域づくり、学生サークル、ジェンダー学習など、様々な領域における実践が報告された。後述するが、これまで早稲田のラウンドテーブルは、学生と社会人の学び合いの場となるように組織されてきたが、2018年度は、様々な大学の学生たちがともに学び合う場となったことが大きな特色であった。それは、今後の早稲田大学でのラウンドテーブルのあり方にとって、一つの転機となるような経験であったように思う。

【写真】2018年度の早稲田教育実践研究フォーラムでのラウンドテーブルの様子。会場の中にポスターを掲示している。（撮影：矢内琴江、2018年11月10日）

早稲田大学の教育実践研究フォーラムは、2006年から始まっている。その背景については、報告書『早稲田教育実践フォーラム2006「実践の長い道行きを語り、展開を支える営みを聴きとる」』（早稲田大学文学学術院教育学研究室、2007年1月）に、次のように記されている。

早稲田大学文学学術院教育学研究室にかかわる多くの大学院生、学部生、OB・OG、そして教員が、社会教育実践、子ども会、国際交流・協力事業、社会福祉関連など多様な現場で実践にかかわりを持っています。

そこで、早稲田大学文学学術院教育学教室では、地域や 職場で展開されている様々な実践に関わり、その組織化に取り組む専門職の力量形成と大学教育をテーマとして、「早稲田教育実践フォーラム 2006」を開催しました。[2)]

このように、早稲田大学のラウンドテーブルは、教育学研究室の博士課程と修士課程の院生や学部生が、すでに地域や教育、社会福祉など様々な領域で、豊かな実践にとりくんでいるという状況があったことから始まっている。それは、報告書に掲載された、報告タイトル一覧を見ても分かるだろう。

【実践研究ラウンドテーブル報告タイトル一覧】

・「MIA青年のための国際理解講座の報告」
＊MIA…武蔵野市国際交流協会
・「不登校の子どもへのピアサポートの振り返り」
・「＋αの学び場　エルムアカデミー実践報告」
・「浦安市国際センターでの実践活動」
・「PKWSFスタッフ　広島の実践を振り返る～世界の子供たちとの熱い10日間を終えて～」
＊PKWSF…ピース・キッズ・ワールド・サッカー・フェスティバル
・「ひまわり子ども会での実践から～知的障害児との関りを通して～」

なお、当日は、第1部が実践研究ラウンドテーブル、第2部が実践研究シンポジウムという構成になっていた。シンポジウムの内容は、以下の通りである。

【実践研究シンポジウム】

＊報告者の所属は2006年当時のもの。

水野篤夫（京都ユースホステル協会職員）
「ユースワーカーの力量形成―〈実践の記録化〉と〈職場集団の形成〉」

前川幸子（大分大学医学部看護学科基礎看護学講座教員）
「看護師の力量形成―省察を基盤とする看護実習を通して」

柳沢昌一（福井大学教育地域科学部教員）
「専門職の力量形成の新たな構想―福井大学教育地域科学部の取り組みを通して」

このような「早稲田教育実践フォーラム２００６」は、全くの白紙状態で始まったのではなく、すでに行われていた福井大学や、日本社会教育学会での取り組み、さらに2005年から始まった「実践研究東京ラウンドテーブル」という実践の蓄積と交流を通して実現されたものであった。そのことは、上のシンポジウムの内容を見ても明らかである。また、フォーラムの運営や報告書作成の実務

を担った院生たちの中に、すでにラウンドテーブルを経験したメンバーがいた。例えば、当時、博士後期課程 2 年だった阿比留久美先生（2018 年から文化構想学部・准教授で、早稲田教育実践研究フォーラム実行委員会のメンバーでもある）は、2004 年 6 月に日本社会教育学会 6 月集会で行われたラウンドテーブルで報告し、その後、2005 年 1 月に実践研究東京ラウンドテーブルに参加し、実践報告を経験している [4]。このように、早稲田大学のラウンドテーブルは、その初発のところから、社会教育の実践研究の蓄積と研究者間のネットワーク、さらにその中で自身の実践・研究を育んでいた院生や学部生たちの協働があったと言えるのではないか。続いて、以下では、私が早稲田のラウンドテーブルに関わり始めた 2012 年以降の実行委員会の展開を記していきたい。

Ⅲ. 学習としてのラウンドテーブルの準備過程

1．学生による実行委員会の運営
ー声をかけ合いながら動く

2018 年で 13 回目になったフォーラムは、毎年、そのプログラムの内容を工夫しながら組織されている。前年の参加者や、実行委員会のメンバーからの声や、その年の学生や院生の関心などをふまえながらプログラムが作られている。2018 年の場合は、午前の部の内容を主に村田先生と阿比留先生が考え、午後のラウンドテーブルを実行委員会の学生が中心になって準備した。この実行委員会は、教員は、村田先生、阿比留先生、矢内、学生は、村田先生の大学院のゼミと研究の授業を受講する大学院生、学部の村田先生が担当する演習 3・9（社会教育）の学生、矢内が担当する演習 5・11（人権教育論）の学生で構成されていた。実行委員会では、プログラム内容の検討、チラシ作り、告知、参加者・報告者の募集、申込管理、グループ作り、当日の運営を行なっている。この実行委員会での活動を、私自身は、2014 年に書いた実践記録の中で、次のように意味づけている。

> ラウンドテーブルの準備のための一つ一つの作業は、一見とても単純で事務的です。場合によっては、みんなでやるよりも、誰か一人が一気にやった方が早くでき、効率的な仕事もあります。例えば、立て看板づくりは、いざとなると一人でも 30 分ぐらいで出来る作業です。しかし、教員ロビーで立て看板を予約したり、チラシに貼る紙を用意、看板を取りに行く、看板に用紙を貼り付ける、事務所に用品を借りに行く、といった作業をみんなで相談しながらやることは、大学の中を歩き回りながらやらなければいけない作業です。大学で自分たちが何か会を開くときのために、大学の色々な場所や物の使い方の仕組みなどを知る機会にもなります。また、冗談も言い合いながらで「楽しい」ですし、何よりも、みんなで学び合う場のラウンドテーブルをやるための準備なのだから、その準備の過程で、みんなで一つの作業をやってみる、ということが大事なのではないかと私は考えています。ラウンドテーブルの準備を通して、この 3 年間で私が特に思ったのは、ラウンドテーブルという学びの会を実施するには、その準備過程そのものが学びのプロセスであることが大事なのだ、ということです。[5]

この時の私は、ラウンドテーブルの準備過程を、共同学習の場として捉えていた。今もその認識に変わりはないが、どのような共同学習の場なのかと考えたとき、それは単にみんなで一つの作業をする場ではないと考える。

ラウンドテーブルが終わると、毎回実行委員会でふり返りを行う。例えば、2013 年の「開催報告」を見ると、課題として挙げられたのは、「実行委員の組織、準備の段取り、役割分担、当日の運営などでは、それぞれがより主体的に動くことの出来る方法を考えていく必要がある」といったことである [6]。こうした課題は、今見てみると、2013 年に特有のものではなかったと思う。実行委員会のメンバーは、毎年変わる。また、当日の運営は、その日になっての遅刻や欠席もある。申込も、毎年、ゼミや授業での参加とりまとめはギリギリになったり、社会人や学外からの参加者などのとりまとめや、実行委員会内での申込状況の共有などが上手くいかない場合もある。これら一つ一つの動きを「反省点」として挙げてしまうと、2013 年に、「課題を克服しながら、ラウンドテーブルを作っていきたい」と書いた言葉は、それから 5 年がたった今も、実現されていないことになる [7]。

例えば、今年のラウンドテーブルは、既に述べたように、他学部や他大学の学生の参加が多く、グループ作りでは、実行委員がギリギリまで検討を繰り返した。初めてのラウンドテーブル参加者もいたので、申込内容がイレギュラーな形のものもあったり、途中で申込内容が変更したり、まとめて参加申込があった機関から、変更の連絡があったりなど、様々な動きがあり、たびたび対応が必要になっていた。そのため、ラウンドテーブル開催の数日前から始まるグループ作りには、申込担当と、グ

ループ作り担当のコミュニケーションが不可欠になる。しかし、情報が入れ違いになったり、勘違い（報告予定者が実は聴き手だったなど）、出欠の未確定などがあった。けれども、グループ作り担当の実行委員も、申込担当の実行委員も、その都度、集まれる人がコース室に集まって、何度もグループを確認し合ったり、知恵を出し合って組み直したり、報告者・ファシリテーターの依頼をするといったことをしていた。私自身も、状況に変化がある中でグループを作っているからこそ、単に機械的にジェンダー・バランスや学年などだけでグループを組まないように、なるべく報告者がどういう人なのか、どういう人同士が互いの実践を聴き合ったらグループの学びが豊かになるのか、といったことを気にかけてグループ作りに関わった。

ラウンドテーブルの準備過程には、他にも、チラシ作成にあたって、データを一から作り写真を工夫してくれた人、授業の合間に、チラシを戸山キャンパス内だけではなく、本部キャンパスにも貼ってくれたり、立て看板を作って立ててくれた人、報告者やファシリテーターをするようにゼミや知り合いに声をかけてくれた人がいる。こうした、一人ひとりの働きがあってラウンドテーブルの当日を迎えることが出来る。しかも、その一つ一つが、必ずしもスムーズにいくわけではない（チラシの写真の選定、告知の難しさ、報告者探しの難しさ等）。

こうした云わば「問題だらけ」の準備過程は、単に効率化を図れば済む問題ではない。みんなにとってより良い学びの場にしたいと考える中で気がつくことだったり、色々な人が集まるからこそ起こるハプニングであったり、配慮する必要があることだったり、初めての経験だから感じる難しさだったりなどで、作業を効率化や簡易化しようとしたところで、解決できないものである。

ふり返ってみれば、私自身が、大学院生として実行委員会に関わっていた時にも様々なことを経験した。例えば、申込状況を見て、社会人の参加が少ない、報告者が少ないとなれば、院生たちがそれぞれの活動の場の人たちに声をかけ直してみた。あるいは、大人数の飲み物の用意が必要になったときには誰かが宅配便で注文をしてくれた。また、多くの参加者を迎えるために、当日のテーブルの配置に工夫する必要があり、会場を何人かの院生で事前に見て、会場設営担当の院生が、会場設営に協力してくれる実行委員会以外の学生たちがスムーズに動けるよう、メモも用意をしてくれた。あるいは、準備過程には参加できない院生も、当日の会場設営は得意だから率先してやりますということを、学校の中で会った時に声をかけてくれた。

準備過程は、実行委員どうしが、廊下で会った時に声をかけたり、コース室に集まったり、連絡を取り合ったりしてやりとりをして、互いの作業を気にし合いカバーし合いながらでしか進んでいかないものなのだ。こうしたことに目が向くようになると、私は、ラウンドテーブルの準備過程で大事なのは、かつて私自身が書いた「課題を克服して」という言葉の後ろにあるような、「反省点」を直してより効率的に運営していくことではなくて、準備過程とはそもそも「問題だらけ」なのだから、問題をなくす方向ではなく、出会った問題にしなやかに向き合えるチームとなることなのではないかと考えるようになった。したがって、共同学習の場としてのラウンドテーブルの準備過程とは、共に学習の場を作っていこうとする時に出会う様々な課題に共に向き合い、応えていくような、カバーし合う力を共同で育む場であると考えている。

２．共同でのチラシづくりの経験―仲間と言葉を吟味し作る

私が初めてラウンドテーブルに関わったのは、2012 年に教育学コースの博士課程に入った時である。最初に参加したラウンドテーブルは、6 月の福井大学のラウンドテーブル、その後、夏にはお茶の水女子大学のラウンドテーブルに参加した。当時、東日本大震災の復興支援に関わる活動を行なっていたので、その活動を報告したが、はじめてのラウンドテーブルで、何をどう話せばいいのか、何をする場なのかがよく分からないままに参加していた。夏休みに入る前には、早稲田でのラウンドテーブルの実行委員会の準備が始まったが、それもどう動いたら良いのか分からないまま、先輩からこれまでの資料を引き継いだ。最初の関わりは戸惑いがあったり、周りの状況も曖昧でぼんやりとしか見えず、自分自身の動き方もはっきりしなかったことを記憶している。一方で、院生仲間と夏休みの間、互いの研究、実践経験、ラウンドテーブルの経験などと照らしつつ、実践とは何か、教育とは何かといったことから、フォーラムのチラシにある「実践」や「ラウンドテーブル」の定義に至るまで、何度も電話で話す機会を持った。

こうした話し合いの経験は、2012 年のラウンドテーブルには反映することは出来なかった。この反映できなかったことを、かつて私は実行委員間のコミュニケーションや、運営の問題として捉えていたが[8]、今ふり返ると、

この時の経験は、学生や院生が中心になってフォーラムを準備していくという私自身の自覚を持つことにつながっていたように思う。さらに、その自覚は、2013年度の「実践し省察するコミュニティ　開催報告」によると、集団的なものであったことを読み取ることが出来る。この年、2012年度をふり返り、取り組んだこととして、学外からの参加者の募集、チラシ内容の検討を挙げているからだ[9]。特に、チラシ内容の検討は、重要な経験であった。村田先生の大学院ゼミのメンバーが中心となって、ラウンドテーブルの説明や、チラシの構成を検討した。メンバーは、ラウンドテーブルに参加したことがある人も、参加したことがない人もいて、参加したことがある人が中心になって、自身のラウンドテーブルの経験をふり返り、チラシの言葉を考えた。このことは、2013年の当時、ラウンドテーブルの経験者にとっては、自身のラウンドテーブルの経験を意味づけ直す機会でもあったと私は捉えていた[10]。しかし、いま改めて実践記録を読んだとき、このように実行委員が、自身のラウンドテーブルでの学びの経験をふり返りながら、チラシの語句を考えることで、まだ経験していない実行委員も、ラウンドテーブルにおける学習のイメージを持つことにつながったのではないかと考える。

【2013年度のチラシ】

第８回　早稲田教育実践研究フォーラム

実践し省察する
コミュニティ

実践の長い道行きを語り、展開を支える営みを聴きとる

学校教育、社会教育、子ども会、国際交流・協力事業、社会福祉など多様な教育、対人支援の現場で実践にかかわりを持っている、学部生、大学院生、教員、そして社会人が、その実践を共同でふりかえり、日々の活動の新たな展開につなげていくラウンドテーブルを開催します。

実行委員長　村田晶子

2013.10.19(土)

10:00-15:30（受付開始 9:30）

早稲田大学 戸山キャンパス
33号館 3階 第1会議室

主催：早稲田教育実践研究フォーラム実行委員会
後援：早稲田大学文学学術院教育学コース
連絡先：早稲田教育実践フォーラム実行委員会
戸山キャンパス 33号館村田晶子研究室 1203
E-mail：wasedajissenforum@gmail.com
Tel/Fax：03(5286)3624

ラウンドテーブルとは・・・

少人数でグループを組み、丁寧に時間をかけて、実践の報告を聴き合い、話し合う、学び合いの場です。
従来の「報告会にありがちな、報告者が「何をしたか」に焦点化し、「いかに上手にまとめて上手に発表するか」が目的ではありません。また聴き手も、ただ報告を受動的に受け止めるのでもありません。報告者は、単に報告するのではなく、実践をふり返りながら、自らの考えや、思いを実践に位置づけて（省察）、実践を捉えなおしていきます。聴き手も、自分の実践をふり返りながら、聴き・話し合いに参加します。
ただのおしゃべりとは異なる、「語る」・「聴く」ということに、参加者全員で、取り組みます。

一日の流れ

10:00～10:30	全体の集まり グループでの自己紹介
10:30～12:00	報告①
12:00～13:00	ポスターセッション
13:00～14:00	昼休み
14:00～15:30	報告②

◆ 申し込み方法 ◆

●対象　：教育や実践研究に興味のある方
●参加費　：無料

実践報告者、ポスターセッション報告希望者を募集しています！自分の実践や活動を語ってみたい、聴いてもらいたいご希望のある方は、その旨ご記載ください。
なお、ポスターはA1程度に作成し、当日ご持参ください。
お申し込みは、実行委員会（wasedajissenforum@gmail.com）あてにお願いします。

①氏名
②所属
③連絡先（電話番号とメールアドレス）
④ラウンドテーブル報告・ポスターセッション報告希望の有無

を明記の上10月10日（木）までにお申し込みください。
なお、メールの件名（標題）は「実践フォーラム申し込み」にしてください。

◆アクセス方法 ◆

●交通
◇ＪＲ山手線　高田馬場駅　徒歩２０分
◇西武線　高田馬場駅　徒歩２０分
◇地下鉄東京メトロ　東西線　早稲田駅　徒歩３分
◇地下鉄東京メトロ　副都心線　西早稲田駅　徒歩１２分
◇スクールバス　高田馬場駅―早大正門、馬場下町　下車

●所在地
〒162-8644
新宿区戸山1-24-1 早稲田大学　戸山キャンパス
http://flas.waseda.jp/flas/access/　（地図）

【2014 年度のチラシ】

2014 年のチラシ作りもまた、院生が中心になって取り組んだ。この時、一緒にチラシづくりに取り組んだ主な院生は、私も含めて、東日本大震災の復興支援に関わる実践経験をもち、ラウンドテーブルに参加したり、企画運営に関わったことのある院生たちだった。打ち合わせでは、自分たちの経験をふり返るだけではなく、「ラウンドテーブルの意義をどんな参加者に、どのように伝えたらいいのだろうか」という視点をもって話し合いが行われた。具体的には、「学生の自分たちにとっても意義のある学びの場だった、社会人の方たちにとっても重要な学びであり、学生と社会人が一緒に話し合う場だからこそ、お互いの学びが深まる場なんだ、だから、学生にも社会人にも来てもらいたい、ということを話し合」った[11)]。

2014 年、社会教育主事講習にファシリテーターとして関わっていた私は、早稲田のラウンドテーブルに関わった 3 年間をふり返った実践記録を書いた。その記録の中では、チラシ作りを「チームを育てる」営みとして捉えた。今、改めてこのチラシ作りとは、どのような営みだったのかと考えると、次の 3 つが重なり合った機会になっていた。

第一に、実行委員の関係を育むことである。チラシ作りの話し合いは、院生同士が、教育実践のあり方、研究のあり方についても語り合う機会となっていた。授業を超えたところでのこうした話し合いを通して、互いに何を実践や研究の中で大事にしているのか、どんなことに関心を持っているのかを知り、ともに学び、学習の場を作っていく関係を育むことが出来たと思う。ラウンドテーブルの後も、一緒に研究会や勉強会を開いたりした。

第二に、学習を作る主体としての私を育てることである。最初に述べたように、実行委員会に入った当初の私は、自分がどう動くのかが曖昧だった。けれども、チラシ作りの話し合いを通して、院生同士の関係が育まれることにより、私はどのような場を作っていきたいのかということとともに、私たちはどのような学習にしていきたいのか、ということを問う私になっていった。

第三に、ラウンドテーブルという学習の場を共同でデザインすることである。チラシ作りは、単にチラシにのせる文言やデザインを考える作業ではなかった。どんな人たちに来てもらいたいか、ラウンドテーブルの意義をどのように伝えたらよいかという問いは、ラウンドテーブルという学習の場をデザインするための言葉であったと言える。さらに、こうしたチラシ作りを行いながら、例えば、社会人ではどんな人に呼びかけたらよいか、自分の関わっている活動で出会った人たちにどう呼びかけ

るか、というチラシ作りの先の動きも話されていた。なお、私は、この声かけも一つの学習的営みだと考えている[12)]。

このようにふり返ってみると、チラシ作りは、ラウンドテーブルを組織運営していくために不可欠な、実行委員会自体が学び合う関係を基盤としながら展開していくことを可能にする重要な営みであったのではないかと考える。

3．ラウンドテーブルの準備過程の省察―記録を書く・他のラウンドテーブルに出る

上述したチラシ作りでは、この作業は実行委員自身のラウンドテーブルの経験をふり返り、その学習としての意味を考え合う機会となっていた。いま、私自身の早稲田でのラウンドテーブルの関わりをふり返ると、こうしたラウンドテーブル自体をふり返る機会がとても重要であったように思う。2012年に博士課程で教育学コースに入ってから、私は、早稲田大学だけではなく、福井大学、お茶の水女子大学、明治大学、静岡大学、東京学芸大学などでのラウンドテーブルに参加する機会を得てきた。特に、ラウンドテーブルを運営する側として、福島県男女共生センターでの復興支援ラウンドテーブルや、明治大学での東京ラウンドテーブルに関わってきた。このように、様々なラウンドテーブルに関わる経験は、各ラウンドテーブルの特色が、その大学や地域の状況の中でどのような学びが今求められているのかということに応えようとした、あるいは、それぞれの場での制約の中で学びに必要な条件をどのように作り出すことができるのかを思案した結果であることが見えてきた。そうした経験を通して、早稲田大学のラウンドテーブルでは何が出来るのか？何をすることが大事なのか？といったことを考えるようになっていたと思う。特に、早稲田大学の場合は、学部生と院生が中心になってラウンドテーブルの準備を進め、当日の運営やファシリテーターも学生が担っていることが非常に重要な特色であるように見えてきた。

さらに、こうした気づきを考えて深めていくことにつながったのは、2012年から2014年にかけてリサーチ・アシタントとして関わった福島県男女共生センターでの復興支援ラウンドテーブルに関して、私自身のラウンドテーブルをめぐる実務を組織学習のコーディネートとして捉え実践記録を書いたことだった。それによって、早稲田でのラウンドテーブルの運営の経験を、他のラウンドテーブルの中で報告をしたり、実践記録を書いたりする際に、学生が中心になって運営するラウンドテーブルの意味を学習という視点から捉えるようになっていった。また、早稲田でのラウンドテーブルの取り組みを、「大学院の授業の一環で」とか、「学生の主体的活動」ではなく、「学習として」という表現にこだわるのも、明治大学での東京ラウンドテーブルで、早稲田でのラウンドテーブルの取り組みを報告したことがきっかけであったように思う。先述したチラシ作りのことを話した私に、聴き手の方が、「それは院生が自主的にやっているのですか？」と尋ねた時、当時、大学院生だった私自身は「みんなで考えて自分たちでやった」というような答えをした。つまり、この時の私は、準備過程を「主体的な」ものだと捉えていた。それに対して、同じグループにいた、入江直子先生が「それは、村田さんが、学生たちが自分たちでやるようにしているところがあるんじゃないかしら」というような内容の発言をした。この入江先生の言葉が、私の中でずっと引っかかり、準備過程やラウンドテーブルをそのただ中にいる視点だけではなくて、それらが、どのような条件の中で実現されていたのかという視点ももって考えるようになっていった。そうすると、院生仲間であれこれと話し合ってチラシを作っていたことは、確かに私たちが「主体的に」やっていたことではあるが、実行委員会を組織して「みんなでやってみよう」という状況が用意されたり、チラシ作りの担当を任されることで、「まずは自分たちが考えてみよう」となる状況が用意されていたことに気がついていく。そうすると、今まで、ラウンドテーブル終了後のふり返りの時に、実行委員が「失敗」「不備」「反省点」として捉えた事柄について、村田先生が「反省として捉えるのではなくて、やってみて気がついたことを言葉にするのが大事なのではないか」と発言していた言葉がより確かなものとして頭に残るようになっていった。ラウンドテーブルの準備過程は、「まずはみんなで集まってみる」「話し合ってみる」「試行してみる」という学習の場として用意されていたのである。

私自身が、そのような場として準備過程を捉え、その視点から関わっていくようになるのは、2014年のラウンドテーブルに、院生であると同時に、総合人文科学研究センターの助手という立場でも関わった後、翌年以降の関わり方について、改めて今までと同じような院生として関わるので良いのか、助手という立場で関わる時、どんなふうに関わったら良いのか、ということを考えるようになってからだ。そのことを考え始めたとき、早稲田大学でのラウンドテーブルの3年間を振り返った実践記録を書いた。それは、ラウンドテーブルの準備過程は、

マニュアル的なものだけで共有できるものではなく、その学習過程としての意味を明らかにする必要があると考えたからだった。

このように、ラウンドテーブルの組織運営の経験自体を、他のラウンドテーブルで報告したり、記録を書くという経験を通して、早稲田大学において、学生が中心になってラウンドテーブルを組織運営することの意味が明確になっていった。そして、今、私自身は、こうした自分自身の認識を明確化させることと、自分自身の大学の中での立場が変化しながら、その立場に応じて、自分がどうここに関わるのかということを、実際に授業をしたり、教育学コースの業務として実務を行いながら考えることによって、ラウンドテーブルの準備過程を、「まずはみんなで集まってみる」「話し合ってみる」「試行してみる」ことから成る、組織学習のデザインの“省察的実習”の場として捉えている。

Ⅳ．ラウンドテーブルにおける学びのあり方

これまで、ラウンドテーブルの準備過程を中心に述べてきた。けれども、私は、ラウンドテーブル当日の各グループの中での話し合いも、この準備過程と大事にしていることは基本的には同じだと考える。私は、ラウンドテーブルを、報告者の実践報告を軸にして、グループのメンバーが互いの実践を深め合う学習の場として捉えている。以下の文では、私自身が、福井大学でのラウンドテーブルを通して、実践報告とは改めて何かを考えながらラウンドテーブルという場を描写した。

> ラウンドテーブルはこの省察の結果や成果を発表する場ではない。〔報告者は〕実践報告によって、自分の省察を語りながら省察を深めていき、その後の話し合いによってより一層深めていく。同時に、(…)聴き手自身も、語られていることに思いをめぐらしながら、実践の意味や価値を明らかにする探究の中にいる。こうした聴き手の存在がいるからこそ、報告者は実践を語る言葉を紡ぎ出せるのであり、実践報告は聴き手との共同で成り立つのだと考えた。[13)]

こうした学習を実現できるようにするために、グループ作りは重要な仕事だ。早稲田大学の場合、院生と学部生が協力し合って行うことが多い。グループ作りのときに、特に配慮しているのは、①ジェンダー・バランス、②社会人と学生を組み合わせること、③ゼミやゼミのグループのバランス、④学年や年齢のバランス、などである。これらを基本的な要素として、グループ作りの際の最も重要な視点だと私が考えているのは（これは、早稲田大学だけではなくて、他のラウンドテーブルでグループを考える時にも共通すると考えている）、①この報告者にとって、この聴き手に自分の実践を聞いてもらうことはどのような意味があるだろうか、②この聴き手には、どんな報告を聴くことが学びになるだろうか、あるいは、この報告をどんなふうに聴き取ってくれるだろうか、③このファシリテーターは、どんなふうにグループの話し合いを深めていくだろうか、といったグループの話し合いのダイナミクスを想像することである。

私は、ラウンドテーブルでは聴き手の存在が特に大事だと考えている。実践報告を丁寧に聴き受け止めてくれる存在、そして自身の受け止めを伝える存在なくして、ラウンドテーブルは成立しない。そして、ファシリテーターは、単なる「タイムキーパー」や「話が盛り上がるようにする人」ではなく、こうした聴き手の力が発揮されるように、「実践をより立体構造で捉えながら、実践の意味の深みを一緒につかんでいくためのグループの相互的なコミュニケーションが展開されるように働きかける」役割を担っていると考える[14)]。

このように参加者一人ひとりにとってより良い時間となるように、様々な想像を働かせながら工夫をし、準備をする。もちろん、実際のラウンドテーブルがどうなるか分からない。想像しつつ、この「分からない」ということも考慮する。この「分からない」という部分は、「諦め」ではなく、ラウンドテーブルに来る参加者一人ひとりの学ぶ力への「信頼」と、大事なのは参加者自身が場を作っていくことだとする「自由」の保障だと考える。

私自身が、この「分からない」部分をとても大事に思えるようになったのは、私自身の早稲田大学のラウンドテーブルとの関り方の変化によるところが大きいように思う。2015 年から東京家政学院大学の「生涯学習概論」を非常勤講師として担当するようになり、受講生たちには授業の一環で早稲田大学や明治大学でのラウンドテーブルへの参加を呼びかけてきた。そして、2016 年から早稲田大学でのラウンドテーブルに参加した。当初、私自身は、「生涯学習概論」の授業の一環なので、公民館職員や市民の参加者が多い東京ラウンドテーブルの方が、受講生にとって意味があるのではないかと考えていた。しかし、早稲田大学でのラウンドテーブルに参加した受講生からは、「同じ年の人たちが、ボランティアとかいろいろな活動をしているのを聞いて、刺激になった」「ボラン

ティアをやってみたいと思っていたことを、グループの中で話をしたら、先輩が誘ってくれて嬉しかった」「色んなことを考えている大学生の話を聞けて刺激を受けた」と言った声が多く聞かれた。また、「緊張して行ったが、ファシリテーターの先輩が、色々と質問してくれて楽しかった」「自分の発言に対して、ファシリテーターの先輩が質問してくれて、それに答えることで自分の発言がだんだん深まることが出来た」といった感想も聞かれた。2017年には、ラウンドテーブルに参加して刺激を受けた学生たちと、地域で夜間中学の映画「こんばんは」の上映会を開催した。これは、全く予期していなかった展開だった。

一方で早稲田大学の学生からは、東京家政学院大学からの参加者がいることで、「自分が勉強しているのとは違う領域の話が聞けて良かった」という感想を聞くことも出来た。とりわけ2018年は、様々な大学からの参加者があった。大学の違いや、学んでいる分野の違いを超えて、例えば、私の参加していたグループでは、「どういう大人になっていきたいのか」「実践しながら、働きながら省察するにはどうしたらいいのか」といったことが話し合われていた。今思い返すと、この話し合いは、これから私たちはどういう社会を創っていきたいのかということだったのではないかと思う。

このように、ラウンドテーブルに参加した大学生たちの様子を目の当たりにし、その後の感想を聞くことを通して、大学の違いを超えて考え合うことが、大学生たちにとって、とても大事な経験になることに気がついた。ラウンドテーブルでは、参加者の誰もが対等な立場であることと同時に、参加者は、それぞれが報告者、聴き手、ファシリテーターという役割でもって、互いにとってより充実した時間となるよう一緒に学びを創っている。報告者は、グループの人たちに伝わるように一生懸命に語り、聴き手はそれを受け止めようとし、受け止めを伝えようと頭をフル回転させ、ファシリテーターはその場にいる人たちの声を引き出すために様々な働きかけをする。ラウンドテーブルは、みんなで集まって、話し合ってみながら、互いの言葉に学び合う対話的関係を創っていくことを試みる場なのではないか。だからこそ、緊張して参加しても、終わるころには、「楽しかった」と言って帰っていく参加者が多いのではないか。対話的な関係であることは、楽しいことなのだ。そして、私は、この「楽しい」感覚こそが、様々な状況、生き方、価値観、考え方、アイデンティティを超えて、その違いを大事にしながら、誰もが対等な存在として一緒に生きていく社会を創っていくための基盤になる感覚なのではないかと思う。ラウンドテーブルを創る経験は、根本的には、私たちの人権意識を共同で育む学びなのだと考えている。

Ⅴ. おわりに

2012年に教育学コースの博士課程に入り、ラウンドテーブルに関わったときの私は、状況がぼんやりとしか見えていなかった。それでも、このぼんやりとした私に、前年までの資料を手渡してくれた先輩がいた。そして、ぼんやりしている私に、電話で話そうと言ってくれた院生仲間がいた。そうして、ラウンドテーブルをみんなで創っていくのは面白い、と思える私になったのには、夏休みでも集まりましょうと言ってくれた大学院の後輩たちがいたからだった。私自身が、この仲間関係の中で変化していったのと同様に、ラウンドテーブル自体も、毎年変化していった。60名程度の参加者の時から、100名を超える参加者を迎える時もあり、院生の皆で社会人への参加を呼びかけることに奔走してみたり、今年のように、色々な大学の学生が集うことになった年もある。この各年の試みは、「たまたま」や単なる「思いつき」ではなく、その時に学生や院生たちの力を発揮していくのに何が大事なのか、あるいは社会教育をめぐる社会や制度が変化する状況の中で、どのような学びの場の創出が必要なのか、ということを、実行委員会の教員や学生たちが、それぞれの立場から考え合うことで実現されてきた。この試行錯誤が出来るのも、毎年の積み重ねがあるからだ。今、改めて考えて見れば、この6年間は、課題を毎年克服していくような階段的上昇ではなく、毎年のラウンドテーブルの中で得てきたものが実行委員会から実行委員会に手渡され、その年に集まった人達の中で展開させてきたことの連なりだった。

［註］

1) 矢内琴江「みんなで学ぶ場所を創ることと、その中で育まれる私―早稲田大学でのラウンドテーブルの6年間をふり返って」、『早稲田教育学研究』、第10号、2019年、27-38頁。

2) このジェンダー・ワークショップ実行委員会のポスターと、その前の公民館職員の方のポスターは、早稲田大学比較法研究所とジェンダー研究所共催イベント「『逃げるは恥だが役に立つ』大分析―ジェンダー・法・社会―」（2018年6月28日、於：早稲田大学）でのポスター・セッションで発表した内容をもとにしている。このポス

ター・セッションでは、ドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』を切り口に、自分たちの経験、組織の仕組み、法、社会システムの中にあるジェンダーの問題を考え、個人やグループで発表した。

3) 村田晶子「報告書作成にあたって」、『早稲田教育実践フォーラム 2006「実践の長い道行きを語り、展開を支える営みを聴きとる」』、早稲田大学文学学術院教育学研究室、2007 年、1 頁。

4) 阿比留久美「「実践を共同でふりかえる」の今までの報告をふりかえる」、『早稲田教育実践フォーラム 2006「実践の長い道行きを語り、展開を支える営みを聴きとる」』、早稲田大学文学学術院教育学研究室、2007 年、4 頁。

5) 矢内琴江（2014）「早稲田大学でのラウンドテーブルの 3 年間のふり返り」、社会教育実践研究フォーラム『学び合うコミュニティを培う―社会教育主事講習が支える実践の展開―』、71 頁。

6) 矢内琴江（2014）「実践し省察するコミュニティ　開催報告」、『早稲田教育学研究』、5 号、102 頁。

7) 同上、102 頁。

8) 前掲 5)、 71-72 頁。

9) 矢内琴江（2014）「実践し省察するコミュニティ　開催報告」、『早稲田教育学研究』、5 号、100 頁。

10) 同上、100-101 頁。

11) 前掲 5)、72 頁。

12) 同上、73 頁。

13) 矢内琴江（2018）「私自身のファシリテーター観の捉え直し」、『教職大学院　Newsletter』、No.115、8 頁。

14) 同上、8 頁。